頭がよく勉強ができる子どもに育てる
東大・弁護士・医者へ導くシンプルな方法

【著作権について】

本書は、著作権法により保護されています。

本書の取り扱いについては下記の点にご注意ください。

本書の著作権は、著者である林田健にあります。

また、本書をダウンロードされた本人のみが読むことを許され内容を活用できるものとします。

書面の事前許可を得ずして、本書の一部または全部を、複製および転載することを一切禁じます。

同じく、書面の事前許可を得ずして、本書の内容または類似した内容を転載、公開、販売することを一切禁じます。

また、本書をコピー、ビデオ、電子メディア、メール、メルマガなどでの複製、転載、転売、およびインターネット上で公開することを禁止いたします。

インターネット上で販売（オークション含む）することも禁止いたします。

万が一、上記の禁止事項を発見した場合は、すみやかに弁護士を通じて法的手段によって解決をいたします。

以下では、本書の内容を一部だけ抜粋いたしました。

ご参考にしていただければと思います。

はじめに

初めまして、林田健と申します。

私はこれまで教育というものに深く関わらせていただきました。

特に、東大や京大などの難関校を目指す受験生の指導を中心にしてきました。

本書は、子どもを「東大に行かせたい」「医者にさせたい」とは思うものの「どのようにして良いかわからない」「勉強、勉強と言うのは嫌だ」とお悩みの方々に向けて執筆したものです。私の経験からエッセンスを取り出し、子育て・教育の観点からお話させていただきます。「勉強」というと、どの塾が良いか、どこの学校に入れようか、ということばかりに目が行きがちです。しかし、「勉強」というのは「教育」と一心同体です。

本書では、あくまで将来子どもが幸せな人生を送ることを目標にしています。その中で、大学受験や資格試験を突破するために欠かせない「学力」を子どもに身につけさせる方法をお伝えしております。幼い頃からどのように子どもを教育するかで子どもの将来は決まっていきます。

ぜひ、より良い教育によってより良い将来をつかんでいただきたいと思います。

子どもを健やかに育てるために

•孤軍奮闘しようとすると子どもに悪影響

親のうち、特に母親は子どもと毎日毎日顔を合わせることが多いと思います。仕事や家事に追われ、子どもと外に出かけて自分自身もリフレッシュできるような機会をなかなか持てず、家という限られたスペースの中で子どもと向き合い、時に孤立無援であると感じることも少なくないはずです。

そうすると、子どもの世話をできるだけ効率的にしたいという気持ちになります。子どもがわがままを言ったり、ぐずぐず言うことが許せなくなってしまうのです。

「何でこんなことをするの！」「いつまでかかっているの！早くしなさい」とつい子どもにガミガミ言いがちになります。ただ、もちろんガミガミ言うだけでは模範的な子育てから程遠いことはわかっていますので、たまたま子どもが大人しく言うことを聞いたときには、「すごいすごい！いい子ね！本当にえらいね！」と過剰にほめてバランスを取ろうとします。

子どもに「あれをしろ、これをしろ」と指示•命令が多く、それに対する子どもの対応によって、過剰に反応してしまう母親が増えているそうです。

子どもというのは厄介なもので、こうしなさいと言われるとやりたくなくなったり、反抗した

りしてしまうのが普通です。この悪循環で母親はイライラが募りときには声を荒げることも多くなってしまいます。

さらには、つい感情的になって手をあげてしまうこともあるでしょう。親が子どもに手をあげるかということ自体は、賛否ある問題で、それぞれの家庭の方針に沿えば良いと思います。しかし、手をあげて大人しくなった子どもを見て、「手をあげると子どもが言うことを聞いてとても楽だ」「この子は口で言ってもわからない子で、手をあげないといけないんだ」と判断してしまうと問題です。虐待のはじまりは、このような形ではじまることも多いようです。驚くべきことに、そう言った母親たちは自分たちの行動を完全に正当化しているケースがほとんどなのです。そのような環境に毎日さらされている子どもたちは、怖い怖いお母さんの前ではとにかく怒られないように言うことを聞く、お母さんから見た「いい子」になります。また、自分で行動を選択できない子どもになりがちです。DV や家庭内暴力を行う配偶者や親は子どものころ、自分がそういった体験をしている場合が多いそうですから、幼いころに子どもに恐怖を植え付けては人格形成に影響することは明らかです。

　周りから見ると身勝手な言動を取る親、世間で言ういわゆる「モンスターペアレンツ」と呼ばれる親の背景は人それぞれです。けれども、元々人柄の良い人がそのようになってしまう場合には、自分一人が懸命に子育てをしてきたんだという自負心が人一倍強いことが多いのです。義両親に気を遣いながら、父親があまり育児の難しい部分でサポートしてくれないとますます

自分がこの子のために頑張らねばと、なってしまいます。

本人が、周りに助けられながら育児をやってきたのだという思いがあれば、感謝の気持ちと引き換えにこういった気持ちは減少することでしょう。とにかく、こんなに自分は子育てを一人で頑張ってきたんだという気持ちが、子どもを大事にしてくれない人への強い抗議となるのです。

もし、ご自身が少しでも上記のような状況にあるのであれば、もっとおおらかに、良い意味で適当に子どもと接してみてはいかがでしょうか。

一般的に、日本の親は子どもに干渉しすぎであると言われます。子どもが多少何か問題を起こしてしまったり、自分の気に入らないことをしたときでも、子どものときに経験「すべき」ことだと思ってみるだけでイライラする気持ちが変わるはずです。

また、同世代の子を育てている他の親と話す機会を増やすことも、様々な効果があります。相談にのってもらった、こんな風に助けてもらったと実感すれば、孤立無援だとは思わなくなります。他の子どもの様子を見れることも非常にいい体験です。これまで、わが子の欠点ばかりに目がいっていても、他の子の欠点を見ることで長所に気付くことができるのです。

子どもにとってもプラスとなります。母親とマンツーマンで向き合っている日常から少しでも開放されること自体がストレス軽減につながります。他の子が我慢しているところを見ると、「自分も我慢しないと」と思うものなのです。自分もみんなに日々支えられながら子育てをしてい

るんだと実感することで、自らが親として育っていくことにもなります。

•英才教育なんて必要ない

私は幼いころからの特別な英才教育は全く必要ないと考えています。

世間では、速読や右脳教育など様々な英才教育が流行しています。人間が教育ビジネスのために開発した様々な英才教育は幼い子どもにとってほとんどメリットはないと思います。よく科学的な説明を用いて、いかにも効果的であると植え付ける広告•宣伝を見ます。「これで他の子と差をつけられるなら」「効果があるかはわからないけど、やらないよりマシだろう」と興味がついつい湧き出てしまう気持ちはわかりますが、少し立ち止まって考えてみてください。

少しの小細工で子どもの成長が早まったり、超人的な能力を身につけることなど、不可能です。

さらに、非常に重要なことですが、東大に合格したり司法試験に合格するのに特殊な才能は全く必要ありません。そう言った意味でも、別の目的がない限り英才教育は害であると考えます。

本来、幼いころに「物事を学ぶ」というのは、体験がセットでなければなりません。

知識として詰め込んだり、脳の活性化を促すだけでは学びとは呼べません。その子にとっての意味を体験を通じて会得するものです。

そこには、感情や価値観などが辞書的な意味に一体化しています。人は、言葉の意味を辞書に載っている定義の通り理解するのではなく、「自分にとって」の意味で理解するのです。早期の英才教育はそういった理解を無視し、とにかくいろいろ知っている、わかったような気がする子どもを作るだけなのです。

そのような子どもたちは、実は理解できていないジレンマを抱えながらも、親の言われるがままに英才教育に励みます。英才教育を受けた子どもたちが感情の起伏が少ないと言われるのも、物事が感情までなかなか入っていかないことが影響しているのでしょう。

　むしろ、英才教育にこだわるよりも、私たちの身の回りにある自然を子どもと一緒に体験できる時間を持つ方がはるかに大切です。あるいは、友達と遊んでときには喧嘩したり、虫に刺されて痛い思いをしたり、母親に新しい遊びを教えてもらったりといった経験を重視するようにしましょう。

幼い頃の経験、特に視覚や嗅覚に訴える印象深い経験は、その後の人格形成に大きな影響を及ぼすだけでなく、物事を学習するときの理解力にまで少なからず影響を与えます。ミツバチが飛んでいるときには、ミツバチは針を持っていて、危険であることを伝えましょう。さらに、ミツバチが人を刺すのは、巣を襲われそうと勘違いして守るために刺すこと、普段食べている甘い蜜はミツバチがいろんな花から集めた蜜を巣に一生懸命に集め、それを人間が採取している事実も教えてあげるべきです。自然界の不思議が知的好奇心を刺激するだけでなく、生命に

対する尊厳の気持ちも感じるようになります。

また、特にしておくべき話は宇宙の話でしょう。空に輝く星の光がどれほど昔に発せられたものか、宇宙の想像を絶する大きさなど（よくピンポン玉と○○といった例えがされますね）、簡単にインターネットで調べられます。考えすぎると、「人間は何のために生きているんだろう」という哲学的な疑問が湧いてきますが、小さなことでくよくよするのがバカらしいという感覚を持つには非常に良い刺激となるはずです。

あるいは、学校の課題でいずれ行うことになるかもしれませんが、子どもと一緒に野菜や花の種をまき育ててみると、植物の生命力を肌で感じることができます。簡単なキットを買ってベランダで育てるのでも十分だと思います。子どもにとっては、何より自分が種をまき水をあげた花が育つ姿を見るのが嬉しくて仕方ないはずです。

学歴について

•就職•キャリアへの影響

人生においてまず学歴が大きく影響するのは、就職活動のときではないでしょうか。欧米で

もアジアでも、企業は採用を決定するときに学歴を非常に重視します。

日本でも散々、「学歴社会はいけない」「学歴があるから仕事ができるわけではない」と声高に叫ばれていながら、就職活動のときには一に学歴です。就職後の出世に関しても、不合理なことではありますが、学閥などで出身大学に影響されることも多いです。

但し、新卒の就職活動で学歴が最重要視されるのは当たり前とも言えます。学生時代に唯一同じ土俵で競い合い、明確に結果として現れたものだからです。エントリーシートに記入するウソかホントかわからない武勇伝で採用を決定する方が無理があると思います。

日本でも最近は、無名大学や高校卒の人は正社員として雇用されることすら難しくなってきました。さらに人材のグローバル化も進んでいます。一流企業であるほど、優秀な人材であれば新興国の人材も積極的に活用しています。外資系の企業になると、さらに高学歴重視の傾向は強いように見えます。学歴があることそのものというよりも、辛抱強さと学習能力が評価されているのです。

•学歴によって与えられるチャンス

現実として、学歴によって世の中から与えられるチャンスにとても大きな差が出ています。

一流企業の内定者の内訳を見るとほとんどが高学歴の学生です。外資系の一流企業のエントリーには、「以下の大学出身者であること」と応募資格に明記されている場合もあります。ちなみにその場合、最低ラインは早稲田・慶応であることが多いです。

加えて言えば、何かあったとき再就職先を求める際にも東大卒であれば、すぐに見つかる可能性が高いです。リストラ等にあっても、その後のチャンスの可能性が学歴のない人とは全く異なります。例えば、日本の大手メーカーではときどき大きなリストラを行います。もっと規模の小さな企業がリストラされた人材を雇いたいというだけでなく、アジアを初めとする海外企業もそのような人たちをほしがっています。先ほど申し上げた通り、海外は超学歴社会ですから、優秀な東大卒の技術者を日本の数倍の報酬でオファーすることもあります。

また、勉強することは人生において選択肢の幅を広げてくれると言えます。学習する力と学歴は職業選択における自由度だけでなく、それによって思い切った決断ができたり余裕を持った人生設計を立てることにもつながります。

つまり、人生を豊かにするという意味においても学歴はあった方が良いと思います。

確かに、学歴が関係ない職業もたくさんあります。スポーツ選手や芸能人、あるいは起業家も学歴はあまり重要な項目ではないはずです。子どもは特にそのような職業に憧れを持ちがちです。

しかし、そういった夢をずっと追いかけ続けることはまれです。例えば、勉強をせずにずっと野球だけをやっていた人は、プロ野球選手になれなかったときに大きなリスクを背負うことになります。また、そのスポーツ以外をやっている人生を想像していないので大変な絶望感に襲われることにもなるでしょう。勉強ばかりに追われるシーンに目を向けると学歴を求めるのはいささか非人間的にも感じられますが、実際は人間らしい充実した人生のために学生時代の数年間必死に頑張っているのです。

…抜粋は以上となります。

お子様のより良い将来のため、購入していただいた方には「子どもを健やかに育てるために」「勉強ができる子に育てる方法」という2大テーマについてそのノウハウを惜しみなく公開しております。

教育を一から深く学んでいただける内容となっておりますので、ぜひご検討ください。